

私の10年 ～ハチメイシからのスタート～



プロフィール

氏名：細田 一彰（ほそだ かずあき）

所属：安来市消防本部（島根県）

出身：島根県安来市赤江町

消防士拝命：平成14年

救命士合格年：平成14年

趣味：家族旅行

初めに

まさか面倒臭がりの私が投稿するとは夢にも思いませんでした。民間の救命士養成所の同期であり、また島根県消防学校の初任科同期である天野忠好さんから投稿依頼があった時は、「ええ～マジで…文章作るのが下手だし…上手くできるかいな…」と思いました。

ただ、私も民間の救命士養成所を卒業し消防に就職してから10年が経ち、これまでに色々な思いや経験をしてきました。作文が苦手なため、思っていることが文章で上手く伝わるか分かりませんが、この投稿が民間の救命士養成所に在学している方、就職して間もない方、または消防の諸先輩方にちょっとでも参考になればと思います。

救急救命士との出会い

「人の役に立つ仕事に就きたい」

高校での進路相談で、当時担任の先生に伝えた言葉を今でも覚えています。この時はまだ具体的な職種まで決めていませんでした。「人の役に立つ仕事」と言えば何か…と考えた時、身近なところに地元の消防署で勤務する兄がいました。兄は「人助け」という仕事に充実した毎日を送っているように見えました。

ある日、その兄から「お前、本当に消防に入りたいかや？ほんなら、こんな専門学校もあるみたいだ」と民間の救命士養成所（専門学校）のパンフレットを渡されました。それが「救急救命士」との出会いでした。後から聞いた話ですが、「弟が消防に就職したいらしいのだが」と職場の先輩救命士に兄が相談したところ、民間の救命士養成所を教えてもらったとのことでした。偶然か、その兄も救急救命九州研修所へ入所し、私と同じ国家試験を受け救命士の道を進みました。

「きゅうきゅうきゅうめいし？」

『きゅう』が何回もつく、しつこい資格だなあ～。でも文字からして人の命を救う資格っぽいなあ～。」

恥ずかしい話『きゅう』がしつこい資格」というのが初めて感じたことでした。

当時のパンフレットには、次のような見慣れない言葉が書いてありました。

医師の具体的な指示によって、心肺機能停止状態の患者に対してのみ次の特定行為が行うことができる。

「半自動式除細動器による除細動」

「乳酸化リンゲル液を用いた静脈路確保のための輸液」

「食道閉鎖式エアウェイまたはラリングアルマスクによる気道確保」

「……………」

「はあ～??意味が分からん…」

勉強嫌いの私にとって難しい言葉が並べられていました。しかし、「救急救命士って、すげえなあ～。医者でもないのに点滴ができたか。かつこええなあ～」と憧れを抱きました。

このことがきっかけで、「人の役に立つ仕事」＝「一人でも多くの人を救いたい」という思いが変わってきました。そしてこの資格を取得し、消防に就職するという気持ちがますます強くなりました。


神戸医療福祉専門学校での決意

2年制の神戸医療福祉専門学校に入学するに当たり、私は決意したことが2つあります。1つは留年せず必ず2年で卒業すること、もう1つは、授業中寝ないということです。昼食後の授業中に数秒の意識消失があったのかもしれませんが、この2つの決意は達成できたと思います。今の私があるのも、家族に支えられて専門学校を卒業できたためです。高い学費と生活費を払うことはとても大変なことだったはずですが、これからも家族に対し感謝の気持ちを忘れずにいきたいと思っています。

**救急救命士科第4期生
～自己紹介～**

ふりがな: ホソダ カズアキ
氏名: 細田 一彰

生年月日 556.5.13 (19歳)
出身地 島根県



志望動機
消防隊員にはできない特定三行刺による
1人でも多くの人を救いたいため、

自己PR
重度の負け方と兼いがあり、勝負ごとにな
るとすぐ熱くなるタイプである。

自分の目指す救急救命士とは
知識と経験をいかし、迅速かつ
的確な処置ができ、責任感のある
救急救命士

**神戸医療福祉専門学校三田校
救急救命士科1年**

[押し入れの奥から出てきた専門学校入学当時の自己紹介]

専門学校では、ほぼ毎週のようにテストがありました。今思えば過去にこれほど長く机に向かったことはありませんでした。また、今後もそうないと思います。それだけ勉強に明け暮れていました。私は寮生活だったので、勉強で分からないところがあれば同期のみんなと協力し合い、また、テスト前になればライバル心むき出し(?)で夜遅くまで勉強をしていました。今思えばこの環境も、私にとっては良いストレスとなり充実したものだったと思います。



[専門学校卒業式 (皆さん地元島根県で活躍されています)]

念願の消防士

ここで私が勤務する安来市消防本部について紹介します。安来市の人口約4万人を管轄しており、平成23年の火災件数は35件、救急出動件数は1611件でした。隊編成は専属隊ではなく、消防、救急、救助と各隊員がオールマイティーに活動しなければなりません。職員は現在87名であり、平成24年7月1日現在で救急救命士は23名在職しています。そのうち7名が民間の救命士養成所出身です。



[ロープブリッジ救出で引っ張り（3番員）でした]

私は平成14年4月に採用となり、現在10年が経過しました。安来市消防本部初の民間養成所出身の救命士であり、また兄弟で同じ職場、兄と同じ救命士といった観点から職員の皆さんに珍しがられました。当時、救急隊として7名の救急救命九州研修所出身の先輩救命士が活動しておられ、主に隊長クラスの方々ばかりでした。

初任科修了後、救急標準課程には行かず、すぐに現場活動が待っていました。民間養成所を卒業した救命士と活動すること自体が職員の皆さんには初めてのことであり、「専門学校卒業の救命士ってどうなんだろう…」と戸惑われたと思います。しかしながら、その戸惑いの中でも「まあ救命士なのだから、自分たちが何も言わないでも円滑な現場活動ができるはずだわい。」と期待の目もあつたでしょう。

私も念願の消防士、または救命士として活躍できると思い、「今まで散々勉強してきたので、シミュレーションと同じ様にやれば現場活動もできるわい。」と多少の自信がありました。ところが、私が思い描いていた現場活動とは異なっていました。何をしても良いか分からず、または隊長から指示されたこともできず現場で右往左往していました。

確かに先輩救命士と同じテキストを何度も何度も読みました。病院実習も同じように経験しました。国家試験も同様に受け合格しました。では何が違ったのか…。やはり大きな違いは「現場経験」でした。専門学校時代にシミュレーション訓練をやってきましたが、傷病者役をするのはその状態を見たことがな

い学生でした。当時テキストを読み、またその絵を見て「たぶんこんな感じだろう」と想像を膨らませながら傷病者役をしていました。また、隊長、隊員、機関員の配役は決まっていたのですが、現場を知らない学生は指揮命令系統がないため各々が隊長であり、傷病者報告をするのも隊長が処置中だろうが何だろうが自分のタイミングで伝え、胸骨圧迫を数える声も「みんな見ろ！俺は今、胸骨圧迫をしているぜ！」と自己主張の声を出していました。いわゆる「船頭がたくさんいる」救急隊でした。とりあえずみんな声が出ていて、元気だけがありました。今思えば、よくそれで隊としてシミュレーション活動ができていたなと苦笑いですが、当時の私には指揮命令系統が分かりませんでした。



[元気ハツラツ専門学校時代のシミュレーション活動]

もちろんこのような状態で育った私は、現場に通用しませんでした。

「その報告は後でいいだろ？優先順位が違うわい！」

「病院連絡するから、ちょっと静かにしちよれ！」

救急出動するたびに今までのシミュレーション訓練と実際の現場にギャップを感じ、自分の不甲斐なさに気付きました。専門学校で何を勉強してきたのかと自問自答の日々が続きました。また隊長に叱られる…、どう動いていいかわからない…、足手まといになる…、色々な思いが交錯しました。救急現場に出場するのが怖くなりました。

以前このようなことを耳にし、今でも頭に残っています。

「その救急隊に知識があり腕の良い救命士が1名いても、現場経験の少ない隊

員と組めば救急隊としての質は落ちてしまう。救急隊は隊として活動するので、自分はもちろん、隊としての質を上げなければならない。」
まさにその当時、私が救急隊の質を落としていたと思います。

キュウメイシの1歩手前、その名も「ハチメイシ」

ある日、あまりに不甲斐なさを感じ先輩救命士に相談しました。
「民間養成所の救命士は現場を知らないので、最初はできないのが当たり前だろ。要は『ハチメイシ』だわい。うちらだって採用された当時は何にも分からなかった。要はペーパードライバーと一緒に。これから経験して行って現場を覚えれば良いわい。」

意外なこの言葉に、肩の荷が少し下りたように思えました。

現場活動の1事例ごとに先輩救命士が行うコミュニケーション能力や活動内容を私のものにしようと頭に叩き込みました。また、以前のシミュレーション訓練では、呼吸回数の計り方や脈拍触知の仕方が「なんちゃってお作法」となっていたのですが、傷病者を常に五感で感じるように心掛けました。現場で分からないことがあればまずは調べて、それでも分からなければ先輩救命士に教えてもらいました。とにかく一人前の救命士になれるようガムシャラに突き進みました。



[トリアージ訓練（観察が『なんちゃってお作法』にならないように！）]

帰署中の救急車内

救急現場では、どれだけ短時間に傷病者の容体を把握するかが勝負だと思います。傷病者が今何を求めているかを即座に判断しなければなりません。正直言うと当時の私はテキストに書かれた症状と実際の現場での傷病者の状態がリンクしませんでした。では、どのようにすれば能率良く対応できるようになるのでしょうか。訓練はもちろんですが、やはり現場経験に勝るものではありません。帰署中の救急車内はフィードバックの時間です。現場活動を円滑にさせるため、先程の現場活動のことを話し合うようにしています。これは隊としての活動方針の共有化を図るとともに若い職員とのコミュニケーションの場にもなっています。隊長としての私の活動方針を理解してもらい、隊員の方には常に活動内容の先を読んでもらいたいと伝えています。もちろん各動作の相互の確認はしますが、先を読むということは想像力が重要です。



[フィードバックは救急隊の質を上げ、共通認識を高めます]

日常生活からのトレーニング

想像力は日常生活からトレーニングができます。日常生活と現場活動は切っても切り離せません。例えば、トイレ掃除の際、便座を上げた状態で便器の死角となった部分に便が付着していたという経験があると思います。掃除を面倒臭がって、便座を上げずに終わらせてしまえば、一見きれいに掃除したように思えます。しかしながら小便をしようとした際、便座を上げてしまえば一目瞭然です。要はここも汚れているのではないかという想像力、または隠れた汚れを見つけるという観察力につながります。

またトイレットペーパーが残り少ない状態で、そこに補充がなければそれに気が付き、2個補充用として置きます。少ないトイレットペーパーが切れた際、さらにもう1個が補充用となります。何でもないことですが、次の人が困らないようにするという思いやりの心を持つことが重要です。このことは、例えば何かの理由で円滑な現場活動ができなかった場合でも、傷病者またはその家族に対し思いやりの心で接すれば、救急隊に対する不信感やクレーム等のトラブルは避けられます。



[思いやりの心を忘れずに]

偉そうに言っている私もまだまだ勉強中ですが、周囲の視野を広げ、思いやりの心をもって日常生活を送ればおのずと円滑な現場活動につながると思います。



[ただいま想像力と観察力のトレーニング中です]

飲みにけーしょんの復活

私が採用された平成14年頃からJPTECの前進であるPTCJの受講や、地元の病院でICLSコースが動き始めました。それらの講習会に救命士の先輩方の後を金魚の糞のごとく付いて行きました。思えば、その時先輩方に「行くで！」と腕を引っ張ってもらわなければ、今の私はなかったかもしれません。特にICLSコースでは病院の医師、看護師の皆さんと「顔の見える関係」が構築できました。今でも講習会にできるだけ参加するようにしていますが、最近改めて感じていることがあります。それは講習会後の慰労会、いわゆる「飲みにけーしょん」の重要性です。

最近コミュニケーション不足が問題視されています。メールの絵文字では喜怒哀楽が表現できませんが、面と向かって話すとなると、どう表現して良いか分からないという時代になりました。講習会では普段話す機会のなかった職種の方と意見を交わし、または「飲みにけーしょん」でさらにコミュニケーションを図っています。その結果、「細田一彰」という救急救命士を知ってもらうことで初めて「顔の見える関係」が少し構築できたかなと思います。1回ではなかなか顔と名前が一致しないので、会を重ねるごとに濃く構築されていくと思

います。職場のある先輩に、「講習会は飲みにけーしょんまでがその講習会。講習会と飲みにけーしょんはセットだわい！」とよく言われます。救命士駆け出しの頃の私であれば、「酒がそんなに飲めないのに面倒臭いなあ」と思ったかもしれませんが、今は参加することで必ず得をすると信じています。「顔の見える関係」と言えば、電話越しの特定行為の指示要請を第一に思い浮かべますが、病院連絡の際、看護師さんにちょっとしたことの助言をもらったり、病院到着後、ちょっとしたことでもお願いできることも顔の見える関係かなと思います。すぐに結果が出るものではないですが、必ず今後の自分に返ってくるでしょう。



[I C L S コース後の慰労会（飲みにけーしょん）]

まだまだ私も勉強中の身です。救急車内でのフィードバックや日頃のトレーニング、または飲みにけーしょんの参加等の繰り返しが「なんちゃって救命士」いわゆるハチメイシから少しは現場に対応できる救命士として活動できるように成長させてくれたと思っています。



[東日本大震災で緊急消防援助隊として活動しました]

民間養成所卒の私にしかできない使命

今後さらに多くの民間養成所卒救命士が誕生していくでしょう。私が採用されてから10年が経過した今、その新米救命士の方々にいったい何ができるかと考えた時、やはり民間養成所卒救命士の気持ちを理解することだと思います。

私は現在、採用されて2年目の民間養成所卒の救命士と共に現場活動をしています。私もまだまだ未熟者です。未熟者ながらも、常日頃より『～だったので、～した。』という説明ができるように「根拠のある現場活動」を念頭に活動しています。彼もやはり当時の私と同じ「ハチメイシ」であり、同じように戸惑いがあると思います。この戸惑いを少しでも解消させ、民間養成所卒の新人救命士が少しでも早く円滑な現場活動ができるように指導するのが私の使命です。また、救急救命研修所や民間養成所卒を含めた先輩救命士にはそれぞれ現場での活動スタイルがあります。新人の救命士の皆さんには、それぞれのスタイルを盗み、自分に合ったオリジナルスタイルを築いてほしいと思います。

今回投稿させて頂いた内容は、民間養成所卒の救命士の皆さんも同じく感じたことではなかったでしょうか。私も含め、皆さんが模索して築き上げたことを今度は養成所卒の新人救命士に同じ仲間として還元して上げてください。そ

れが先駆者としての使命だと思えます。

最後に。同期の天野忠好さんには「体に良いストレス」を与えてもらったことに感謝したいと思います。大変良い経験となりました。

だんだんねえ～